

キャリアデザインに係わる気掛かりな概念の 考察：再帰性、恒常性、伝統主義、そして フrendシップ

KOKADO, Hiroyuki / 小門, 裕幸

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

7

(開始ページ / Start Page)

179

(終了ページ / End Page)

203

(発行年 / Year)

2010-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007365>

キャリアデザインに係わる気がかりな概念の考察

—再帰性、恒常性、伝統主義、そしてフрендシップ—

法政大学キャリアデザイン学部教授 小門 裕幸

昨年夏、私は、なお、日本人の個にこだわっていて、社会学的・哲学的・心理学的な書物にも手を染めた。そして関心は政治学にまで及んだ。私の専門であるアントレプレナーシップという概念が農耕民族たる日本人には理解が及ばないのではという主張に対し、それを覆すヒントが欲しかったからである。その過程でキャリアデザインに深く関係する、あるいはキャリアデザインを行うにあたって詰めておくべき、と思われる概念に遭遇した。それらは再帰性、恒常性、伝統主義、そしてフрендシップの四つである。

再帰性については、ポストモダンの議論が喧しいなかでイギリスがサッチャーからブレアへ政権交代したとき、ブレアのブレーンとして登場した社会学者ギデンズに、その重要性に気づかされた。彼は、彼の思想のバックボーンとして再帰的近代という概念を使っているようにみえた。

恒常性とは、再帰的に果敢に世の中を変えて行くとしても、社会を崩壊させないでセーフティネットが働いて安定軌道に誘導するための思想である。

そして、もうひとつは、伝統主義である。日本人はキャリアをデザインするとき資格を重視しハウツーに偏りがちである。型にはまり型をつくることで安心しようとする。それは伝統主義的な日本人的な性癖ではなかろうか。

グローバル化が人種や文化を越えた様々な人たちとのつきあいを必然としている。私は日本人には三つの新しい行動様式が必要であると考え始めている。最後のフрендシップはその三つ行動様式の一つとして検討するものである。それは、日本人が得手でない自己主張をするまえに人とつながるためのもので

ある。あとの二つは、参考までに書き添えるとアントルプルナーシップとスチュワードシップである。

1. 再帰性という考え方

1994年、ポストモダンとモダニズムの議論に辟易した、社会学者、イギリスのアンソニー・ギデンズ、ドイツのウルリッヒ・ベックとアメリカ人であるスコット・ラッシュは、それぞれ微妙に認識の差はあるものの、再帰的近代という概念を打ち出す。彼らは、近代がポストインダストリ（脱工業化）を経て、さらには、グローバル化のうねりに巻き込まれる中で、個は、再帰的に行動した結果としての現代をつくっているという考え方を提示した。

再帰性とは、そもそも英語の *reflexive*、*reflective* (*recursive* も使われる) のことで、日本語では、反応する・反動の・内省的という言葉をあてている。*reflexive* する主体を自分におきかえて OED にある説明を翻訳すると、「自分自身を問い直すことにおいて、自分を考察すること、あるいは自分の個性や存在の効果を考察すること」⁽¹⁾ となる。アンソニー・ギデンズも、再帰性という概念について、自分自身を意識的に対象化し、その行為に関する情報を反省的視点に立って、個を主体的に投げ出して再構築していく能力のことであると表現している。再帰性については、学問的にもよく使われる言葉で、社会学や精神分析の分野では、再帰的存在とは「人間が理性により自己を完全に支配できる存在⁽²⁾」を意味する。いずれにせよ、再帰性という言葉は、理性的なニュアンスをもつ強い自立した個を連想させる言葉である。キャリアデザインが自立・自律し自分の選択次第で未来が変わりうるということを前提にする研究であるとすれば、再帰性は、極めて縁深くなるべき言葉であるように思える。我々がキャリアという動的な概念に反応し、それをデザインするという営為を発想したのは、近代の進化という同じ時代背景の中で、ギデンズらに共鳴するものがあつたからではなかろうかとも思う。

ギデンズは再帰性という概念を近代に重ねて次のように説明する。

近代の再帰性はシステムの再生産の基盤そのもののなかに入り込み、その結果、思考と行為とは常に反照しあうようになる。……近代

の社会生活の有する再帰性は、社会の実際の営みが、まさしくその営みに関して新たに得た情報によって常に吟味され改善され、その結果、その営み自体の特性を本質的に変えていくという事実に見いだすことができる⁽³⁾。

言い換えると、再帰性とは、近代が進化して巨大なシステムが生活世界を破壊する程に発達していく中でも、個の自由意思たる再帰的行為の積み重ねが、別の世界を切り開いていくこと、つまり、個には再帰性があるので、行きすぎた宿命論的な或いは決定論的な近代の営為に対して修正を加えることができ、また、個の再帰性が巨大システムとなった近代の一層の進展に不可欠な新たな機能を生み出すという考え方である⁽⁴⁾。より具体的には、個は、個人化し開放されているがゆえに、高度の教育を受けることができ情報処理能力を身につけ、ひいては問題を探求し問題を解決する能力を高めているというのである。なお、ギデンズ風にいえば、イギリスという国は再帰的個が非人格化する巨大な官僚的福祉国家を変革する。個が知識集約社会で市民としての力を高め、小規模集団の集合体として新たな参加型の社会運動を展開し、多元的民主主義を実現するというのである。

ギデンズは個により強い個を求めている。超大型長期トラック、ジャガノートに喩えて、個は、人生という道路を運転するのだが、その車の操作を誤ると大きな危険が待ち受けているがゆえに、緊張感をもって運転しなければいけない。個は、様々な人との出会いの中で、人とのディスタンスの取り方、つまり、疎遠とするのか、親密につきあうのかを考える。また、仕事でも顔が見える人たちと信頼関係を構築する一方で、顔が見えない人たちとの巨大化する市場を介する関係性にも配慮しなければいけない。個は、日々吸収する諸々の知識や体験を、既存の知の体系、つまり制度やシステムや、方法・マニュアルなどにつきあわせながら、自力で調整して行かなければいけない。功利的に自分の生活圏だけにとどまっていたよいのか、公共的空間で、個として踏み込んで、積極的な行動をとるべきなのかどうか、などなど、錯綜する現代という現実の中で、働くものとして、市民として、地球人として、再帰的に生きていかなければいけないとするのである。

182 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

スコット・ラッシュは、個とコミュニティとの関係性に言及し、再帰性を、社会学者ピエール・ブルデュを援用しながら、一つは自ら身を投げ入れることであり、二つは個の空間がオープンで拡張的となることであり、三番目は意識的な自発性の必要を説きつつ・・・伝統的なコミュニティに比べはるかに頻繁で継続的な再発明を行うことであるとしている。最後に、そのコミュニティは具体的な道具や生産物のような物質的なものばかりではなくて、抽象的で文化的なものへの嗜好があるのではと、文化、つまりは人間に立ち返った関係性の重要性についても指摘している⁽⁵⁾。

再帰性というのは、自律した個が自然環境や社会環境に対峙して、主体的な選択を行うことにより社会自身も変化するということを意味している。そのとき、社会も、個の選択の積み重ねのなかで変化し再構築されていくのである。選択の対象をキャリアに読み替えれば、再帰性は、キャリアデザインそのものであり、各人が良いキャリアデザインを思考する営みが良い社会をつくるといういい方ができるのではなかろうか⁽⁶⁾。

また、気鋭のイギリスの社会学者ディランティも、ポストモダンの議論の中で、個の再帰性や創造性に言及している。曰く、

ポストモダン・コミュニティは、伝統的でもなければモダンでもなく、自らの再帰性、創造性、自己の限界に対する認識によって支えられている。ポストモダンのコミュニティ概念は、自己と他者の関係の流動性を強調し、閉鎖的ではなく、開放的なコミュニティ観へと導く⁽⁷⁾。

ディランティは、舞台をポストモダンに置きながらも、個を時代に浮遊するものではなく、自立し自律する強いものとして捉えている。そのときの個は、より開放度が高くなり、時代をポジティブに捉えているようにみえる。ディランティの、この明るさにも似た人類への楽観は、次に述べるレフキンのEU観と通ずるものがある。時代を前向きに捉えるキャリアデザインの考え方に通じるものがある。

2. EU の理念とその再帰性

2004年、アメリカの文明評論家であるジェレミー・レフキンが『ヨーロピアンンドリーム』を上梓した。彼は、近代の合理的な強い個により実現した自由と民主主義の優等生国家であるアメリカに、カーボーイの子として生まれ、アメリカンドリームの精神をこよなく愛し、生まれ変わってもアメリカに生まれたいとする。その彼が、モダニズムの頂点を極めたアメリカのパラダイムは新しい政体 EU を推進する欧州の理念にシフトすると予言している。

「アメリカの精神は未曾有の物質的繁栄をもたらした。その中で、本来の人間の幸福がよく見えなくなったのだろう。モダニズムが進化し、リスクや不安定性が増幅される中で、強い個がつながりを求めだした、そのようなときに、ヨーロピアンンドリームが生まれた。そして、それは相互の結びつきを強めるグローバル化する社会に適したものののだ」とレフキンは、アメリカンドリームに対比する形でヨーロピアンンドリームという言葉を使い始めている。

モダニズムの象徴たるかつてのアメリカンドリームとは、独立自尊の合理的な個が、宗教心篤く勤労を尊び、人生の目的は自由に関かれた機会を捉えて経済的成功を追い求めることであった。EU を創造するヨーロッパのパラダイム（ヨーロピアンンドリーム）は、生活の質（QOL）、持続可能性、平和と調和を三つの柱として⁽⁸⁾、余暇や人間性の実現、文化的アイデンティティの尊重、世界主義（領土に縛られない）、宗教心ではなくて世俗的、支援活動・平和維持活動の重視、忠誠心はローカルからグローバルまで、などで、アメリカンドリームとは、対照的である⁽⁹⁾。そして、ヨーロッパ人にとっての自由とは、自律することというより帰属することであり、自由であるとは、他者との無数の相互依存関係にアクセスできることだと結論づけている。アクセスできるコミュニティが増えれば増えるほど、満たされた有意義な生活を送るための選択肢や機会が増える。他者との関係、他者とのつながりが、包括性〔排他性の対極にある inclusivity〕をもたらし、包括性が安全をもたらすのであるとする⁽¹⁰⁾。確かに、欧州は東欧が堰を切ったように資本主義化する状況下、世界規模に展開するグローバル化の大波を受けている。そのような状況の中で、自由意思たる個は、再帰的行為として、他国・他者・他民族との関係性を人生というキャンバスに投射して、ギデンズのいう「その営み自体の特性を変えてい

184 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

る」ように私には映るのである。

EUは、地域やコミュニティをキーワードとした新時代のガバナンスのかたちを強かに構築し一步一步前進している。既に、加盟国は27ヵ国に及び、人口も5億人に近づいた。領土は4.3百万平方キロメートルで世界第七位、GDPも14.4兆ドルとなり世界第一位に躍進している。共通通貨ユーロを生みだし既に基軸通貨の一つとなっている。

EU生みの親と言われるフランスの経済専門家であり外交官であったジャン・モネは、当初より「我々は国と国を統合しているのではなく、人と人を統合している」と宣言していた。EUは、時代の変容に対して変幻自在にかわる一種プロテアン政体のようにもみえ、また、EUに属す国々、多くの地域、国を超えた地域の連合体がそれぞれの物語をつくるという意味ではポストモダンを具現する政体ともいえない。新しい統治機関は、国家の証だった領土の所有権を主張しない。しかし紛れもなく歴史上初の超国家的政府（法的には国家）である。当然のことながら、その権限はEUを構成する加盟国が国内でもつ権限に優先する。EUは加盟国領土内での個人の活動を規定できるのである。EUの存在意義は、領土支配や課税権、警察・徴兵など動員権限にあるのではなく、行動規範にある。その規範は、普遍的人権を必要条件とし、法律や規則、指令を通して運用されるが、もっとも重要なのは、その運用が、地元、地域、国、超国家、グローバルの各次元で活動する多様な参画者との取り決めや会話や交渉の継続的プロセスによっている点にある⁽¹¹⁾。

EU憲法について、ヨーロッパンドリームの著者、ジェレミー・レフキンはずぎのように説明している。

憲法の文面は普遍主義で一貫している。焦点が国民でも領土でもなく、人類と私たちが住む地球に定まっていることは明らかだ。その趣旨をまとめるとしたら、人類の多様性を尊重し包括性・寛容性（inclusivity）を高め人権と自然の権利を擁護し、生活の質を向上させ、持続可能な発展を追求し、人間性の実現のために人間の精神を解放し、永遠の幸福を築き、グローバル意識を育むことへの取り込みとなるだろう⁽¹²⁾。

その特徴は、中心なき統治にある。中央集権化された階層的な指揮管理にはなく、あくまで全体の調和を図ることを目的とした、民族国家、NGO、地方政府、市民社会の諸組織が参加する地域主権政体の統合体で、統治のやり方は、それらの幅広いネットワークの一体化の促進であると言ってよい。統治の決定は、その決定の影響を受けるコミュニティや有権者にできるだけ近いところで決定されるべきという補完の原則が貫徹されている。また、EUのパラダイムは、自律した合理的な強い個によって形成された古い近代のイメージを越え、再帰的に、新しい本質を希求しているようにみえる。営々として受け継がれてきた欧州の文化伝統という次に述べる恒常性の基盤の上に、いや確たる恒常性があるが故に新しい時代の哲学を再帰的に描けるのではないか。

EUの結成は、戦後50年以上をかけて達成した偉業である。欧州の戦争の歴史を平和の悲願で塗り替えんとする空前絶後の企てだ。EUの構想者さえEUとは何かが分からなくなっている。国のような働きをするが、そうではない。EU市民はパスポートを共有する。様々な価値観や文化をもつ人々がEU市民としてのそれぞれの人生を歩み始めている。

国境を越える交易は当然であるが、労働の移動も容認している。グローバルキャリアを実現している多くの人たちが既に存在するのである。教育面でも大きな進歩が見られる。ソクラテスプログラムと呼ばれる学生と教師のEU間移動推進が実行に移され、エラスムスプロジェクトと呼ばれる奨学金制度も確立。ダビンチプログラムと呼ばれる他国での仕事研修も実践されている。若者教育でも、ユースプログラムと証して15歳以上のボランティア奉仕機会の提供が行われている⁽¹³⁾。

3. 恒常性（ホメオスタシス）という考え方

恒常性⁽¹⁴⁾とは、そもそも、生物は、生体の内部や外部の環境因子の変化にかかわらず生体の状態を一定に保つような仕組みを内蔵している、そのような性質のことをさす。心理学的には、恒常性とは、幼児期の他者の全能のイメージを保存しながらも、その担保のもとで現実認識を可能にさせる機能であるとされる⁽¹⁵⁾。恒常性が奪われている統合失調症者が他者や世界を信じられず、絶えず不安で目の前の現実にとらえられているように、恒常性が可能とする想像

性は、人々の言語や創造性を可能にするものである⁽¹⁶⁾。

恒常性は社会にもあてはまると考える。個が再帰的行動をとって社会が変化・変革するとき、その変化・変革の結末が最終的には安定・秩序をもたらすものでなければいけない。個は、ばらばらで浮遊する混乱状態、つまりアノミー的状态にならず、無秩序に陥ることがないようにしないといけない。個自身にとっても、その再帰的行動が自己破滅に至るようなことは避けなければいけないのである。

4. 社会の恒常性を求めて

くどいようであるが、近代は、仲介者を排除して直接個と神が対峙するという構図をつくり、自律した強い個は自由を獲得した。人類は科学を得て、合理的な人間に変身し、経済は成長し生活は豊かになった。しかし、科学は、大量殺戮の世界を生みだし、成長する経済の暴走が地球環境を破壊し始めた。自由で民主的な社会をめざした個中心の個人主義も、社会的存在であるはずの個を分離分裂させ、政治的にはポピュリズムに陥り、精神的に浮遊する人たちを生み出している。自立する個は、なお孤独感にさいなまれ、また、声高にうたいあげられた自由も、実は良く考えると、個に選択・決断という労苦を強いているようにもみえる。

しかし、近代を獲得した個は、自由で伸びやかで主体的であり、決して一人ではない。他者との再結合を繰り返し、様々な労苦にチャレンジしている。強く自律する個は、安心安定の伝統主義に回帰することなく、再帰的に決断するという途を着実に歩んでいる。この再帰性が担保されるのは、社会にそれを支える何らかの仕組みがあるのではないか。個をお互いにサポートする仕組みが社会に埋め込まれているのではないか。それが社会の恒常性だと考える。

ヨーロッパンドリームは、自由を得た個の自律性を損なうことがないように、個の新しいつながり方を提示している。それは、自由と人間の尊厳を基盤とする欧州文化の既存の恒常性を補完する試みのように、私にはみえるのである。

ソーシャルキャピタルも、そのコミュニティにおいて個と個において信頼関係が構築され、再帰性と恒常性の程よいバランスがとれている状態の中で実現

するものであり、そのことが経済的価値を生みだす。キャピタル（資本）と呼ばれる由縁となっている。また、政治学の分野における保守主義も社会の良い意味での恒常性だといえるのではなかろうか。

保守主義のバイブルといわれる『フランス革命に付いての考察』を著したエドモンド・バーク（1729－1797）は、イギリスの名誉革命をフランス革命と比較して、

「人間は習慣の創造物であり、社会の先入観（prejudice）によって支配され、その中で過去、現在、未来の連続性を当然のものとして生活している。社会は《作られるの》ではなく《成長するもの》であり、理性の役割はこの先入観の枠内で機能することにあるのであって、先入観を分析したり、ましてやそれを解体することにあるのではない。社会は慣習（法）の蓄積であり、名誉革命は古来の法と自由との保持ないし回復を目的とするものと解釈される。・・・自由や権利は歴史の中で成長してきたものであり、あくまで具体的なものと考えられる。・・・具体性のない《人間の権利》というような抽象的な原理のみで社会を破壊しようとする革命の行き着く先は、歴史が営々として築いてきた社会的紐帯の破壊をもたらし、いい加減な人間たちによる権力の壟断があるのみ」とフランス革命を断じ、社会の恒常性の重要性を訴えている⁽¹⁷⁾。保守主義という良い意味での恒常性が地に足のつかない再帰的突出行為に歯止めをかけているように見えるのである。

また、アメリカ合衆国建国時、憲法を創り、人権宣言を起草することになるトーマス・ジェファースン（1743－1826）等のリーダたちは、自由という原理と社会の安定性との適正な割合での混合、つまり、理想の高邁さと恒常性の維持のバランスの取り方について苦悶している。独立戦争後の1776年から1787年にかけて、建国者たちの問題は、どのように自由を実現するかということから、自由という文脈のなかで秩序をどのように根づかせるかということに変化した。彼らは、米国という国が長期に生きながらえるためには30年毎に革命的変革が必要だとしながらも、自由が純粋な民主主義を混沌へ導く可能性があるとして極めて慎重であった。民主主義参加者の普遍性を主張していたジェファースンでさえも、エリートが自然発生的に指導していく方法を好んでいたといわれる。曰く、

政府の安定性とは、市民社会によってもたらされる国民の心の平静さや自信と同じように、国家の特性として必須のものである。しかしながら、これらの要素と自由という原理を比べてみると、それらを適正な割合で混合させることが、いかに難しいかということに気づくであろう。共和的な自由の特性は、すべての権力は人民に由来すべきだという一方、権力を委ねられた人々や能力のある人々が大衆に迎合しない見識をもちリーダーシップを発揮することを期待している⁽¹⁸⁾。

バークもジェファーソン達も、個の再帰的行動を期待し奨励するが、一方で社会を不安定化させないような恒常性とのバランスの重要性を強く意識していたのである。

米国の競争的資本主義において、自立し孤独となった個を支えているものは、セラピスト、メンターやボランティアの存在であり、寄付やアソシエーション文化という社会の仕組みである。それは、個人主義に基づく彼らの個のつながり方であり、自己主張（assertion）しながら上手に集団をつくっていく能力である。と同時に、それは、能力ある誰もがリーダーシップを発揮する仕組である。そのような装置が歴史と伝統に培れ社会の中に埋め込まれてきたようにみえる。社会の恒常性といって良い。

翻って日本を考えると、再帰性と恒常性のバランスを失し易い風土にあるのではと危惧される。集団至上主義に陥りやすく、その場合社会の恒常性の砦となるべき良き伝統や慣習をなぎ倒し、そして法をもゆがめ、宗教をも封じ込め、合理性を押しつぶす。マスコミも、個としての主張は少なく集団主義に取り込まれ、顔色をうかがい場の空気をこぞって文字にするきらいがある。個に対する権限の委任とそれに対する責任という行為が集団主義文化の中で形骸化する。委任に対するアカウンタビリティという言葉がみんな（集団）で頭を下げればよいという儀式に矮小化される。そしてガバナンスという言葉が空疎なものとなる。委任と責任、ガバナンスは、欧米社会が生み出した一つの恒常性ではなかろうか。日本では、個においては再帰性を抑制するシカタガナイ文化が深く染みこみ、外部から加えられる力に対する抵抗力が弱い。そのような社会を構造化してしまったように私には映るのである。

前に踏み出そうとする再帰性を押しとどめるモメンタムが、日本的集団主義の文化伝統の中に潜んでおり、時折首をもたげるのではないか。集団の全員一致を良しとし排除の倫理が働く文化は、多様性を否定し天気の良いときは良いが、雨が降りだすと菌車が逆転し、先が見えなくなる。日本はその可能性を秘めた社会ではないのか。点検を要する。

米国のくにづくり、まちづくりは、保守と革新のバランス、理想と現実のバランスが意識されているようだ。雨が降っても負けない重量感、そして圧力を跳ね返すエネルギーがある。彼らは、簡単におれない元に戻る力という意味をもつレジリエント (resilient) という言葉をよく使う。キャリアについても、キャリア・レジリエンスという言葉が最近使われるようになっていく。我が国には、「何くそ」と頑張る底力が不足し始めたのではないか。

社会の恒常性とは、再帰性によってもたらされるイノベーションを巧みに受容できる社会の伝統や文化のことであるともいえる。それは、個にとっては、慣習に裏打ちされた教養や経験（人文学）を積み重ねながら、主観的に良いキャリアを形成することを担保する多様な選択肢が用意されている場でなければいけないし、社会にとっては、限らないイノベーションが繰り返されても安定装置が駆動するシステムでなければいけない。

キャリアデザインは、このような状況の中で自分をつくり、自分の人生は自分で切り開き、そして自分の糧は自分で稼ぐしたたかさを養う思想でなければならない。

5. 伝統主義

京都の嵐山を北西に一山越えたところに、亀岡市というまちがある。明智光秀が「時は今雨（天）がした（下）しる五月かな」と京の本能寺を目指し踵を返したところである。先日そのまちにある旧家の葬儀に参列した。そこには古い京都がなお息づいていた。葬儀社が市の施設を使って現代的に式を執り行うが、その現代の様式に古来の伝統的様式が入り込んでいる。旧来の様式を頑迷に守るが故に滑稽にも映る光景を眼にすることになった。村落共同体という狭い時空間に人間を閉じこめたところで行われる作法に則った儀式である。朝から晩までそれが続く。個の主体的な判断の余地はなく、予断が許されない。疑

190 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

念も理屈もそこでは引っ込む。葬儀は約一週間続いた。様式が決まっていてそれに従うことに価値を置けば何も考えずにどこにも行かず時間が消えてしまう。日本人はつい先日までこのような世界に生きていたのである。いや、なお、個においては型にのみ頼る伝統主義的な生き方をしている人たちが多いのではと考えさせられた。

そもそも、近代は、伝統主義からの離脱であり、個が、狭い共同体という世界に封じこめられていた状況から、限りなく広い時空間へ飛躍することを可能にした考え方である。それは、宗教的にも思想的にも歴史の奇跡と呼んでもよい大事件であったといわれる。個が自分の行為の起源や結果を考えることなく、これまでなされてきたことを、ひたすら繰り返す場合、その行為が伝統や伝統的行為である⁽¹⁹⁾。ギデンスはつぎのように述べる。

伝統文化では、過去は尊敬の対象、諸々の象徴は、それが幾世代もの経験を含み、経験を末代に伝えるものであるために尊重されてきた。伝統とは、行為の再帰的モニタリングを共同体の時空間組織と結びつけていく様式である。伝統は時間と空間を操縦する手段であり、個々の活動や経験をいずれも、過去・現在・未来からなる連続性の中に挿入していき、代わって時間や空間を社会の実際の営みの繰り返しによって構造化していく。・・・この時代は、変化に抗っていたのではなく、変化に対し何らかの意味をもたらす独立した時間的・空間的標識を、ほとんど存在せしめない状態にあったと理解すべきである。個にとって時空の拡大が常態とはならない静態の状況が、伝統というものであった⁽²⁰⁾。

従って、ギデンスの定義する近代は「社会関係を相互のローカルな脈絡から「引き離し」、時空間の無限に広がりにより再構築すること」であり、それは、憲法に明記されている職業選択の自由や移動・居住の自由を獲得することに至るのであるが、ギデンスは、それを「脱埋め込み」と呼んでいる。この「脱埋め込み」という行為を行う手段を、時間的・空間的標識ということばで説明する。それらは、具体的には、広範な利用を可能とする貨幣であり、もう一つは（専門性という抽象的概念を信頼にたつものにする）専門家システムである。

それらがほとんど存在しない世界が伝統社会であったのである。

生粋の関西人であった司馬遼太郎が「江戸・東京は貨幣経済を理解しないが故に合理性という尺度で戦争を判断できなかった。関西人なら絶対にそのような判断はしなかった」と生前嘆いていたが、我が国は、なお貨幣経済が浸透していない社会、型や作法が先行する専門家をつくろうとしない社会なのかもしれない。

伝統主義社会では、個は、物理的に狭い空間である共同体に閉じこめられていた。慣習に封じ込められた個にとっての時間軸は瞬間であり、個は、選択・決断という判断の余地の少ない時空間に閉塞し、当然のこと個は、自分の未来を遠く見通すものではなかったのである。まして、共同体のなかでの役割（calling）は決まっており、キャリアデザインなどあり得るはずもなかった。

6. フレンドシップ

古来、フレンドシップを巡っては哲学的に議論され、米国においても社会の基本として位置づけられているものである。ここでは、フレンドシップという概念について、歴史を振り返り、キャリア社会となった現在の米国における認識を確認し、その上で、我々の新しい行動様式としてのフレンドシップについて考察してみたい。

i) ギリシア哲学におけるフレンドシップ

古代ギリシアでは愛（love）について三つの概念に分類している。Agape、eros、そして philia である。Agape は如何なる対象物に応えることなく、その代わりに愛されるものに価値をつくりあげる愛のことで、神からの愛・神への愛へ、そして博愛と意味が拡大している。eros と philia は対象物の特質（merit）、つまりは愛されるものがもっている善や美に対する愛のことで、eros は対象物に対する情熱的な欲望で、典型的には性的なものである。Philia は好意を持つが故に関心がある、あるいは友好的な感触をもつことで、精神的に同じアイデンティティを持ちたいとする欲望とされ、フレンドシップは、そもそも philia に由来するといわれる⁽²¹⁾。そして、Love は特定の人に対する情緒的な態度（evaluative attitude）であり、それが相互に応酬的であろうとな

192 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

かろうと、確立した関係になろうとなかろうと関係はない。一方、フレンドシップは、お互いが特別な関心を寄せ合う関係性であり、相互に何らかの見返りがある、片思いの愛はあるが、片思いのフレンドシップは意味がないといえる。従って、フレンドシップは、互酬的愛のケースであると同時に、意義ある相互作用が起きることが必須要件と理解されている⁽²²⁾。

また、哲学的議論ではアリストテレス⁽²³⁾が、フレンドシップの語源となった、*philia* という概念を提示した。*philia* には三種類、つまり、快楽 (*pleasure*) ゆえのフレンドシップ、有用 (*utility*) ゆえのフレンドシップ、善 (*virtue*) ゆえのフレンドシップがあるが、快楽と有用のフレンドシップは本物ではない⁽²⁴⁾。真のフレンドシップは、友の卓越性に動機づけられる善ゆえのフレンドシップである。

また、哲学的に深く議論される問題として、相互ケア (*mutual caring*)、親密度 (*intimacy*)、行動共有 (*shared activity*) がある。相互ケアは友人のために共感 (*sympathy*) し、行動 (*action*) として現れるものである。親密性については、親密性の浅いフレンドシップ (*acquaintance friendship*)、親密性の高い (*sense of a bond*) フレンドシップ、そして自己開示 (*self-disclosure*)・信頼の絆 (*bond of trust*)・結束 (*solidarity*)・感情移入 (*empathy*) などの論点のある親密性の問題があり、さらに、行動共有についても、フレンドシップにより動機づけられているのか、関心領域の共通性や親密性の証といえるのかなどの問題がある⁽²⁵⁾。

ii) 米国にみるフレンドシップ

キャリアという言葉を生み出した米国は社会では、フレンドシップについて、どのような認識をもっているのだろうか。ここでは、米国の著名な社会学者、東海岸のハーバード大学の教授と西海岸のカリフォルニア大学バークレー校を中心とする学者グループのフレンドシップに係わる捉え方を紹介しておきたい。

「機会があれば自分を見せて自分のことを主張する (*show&tell*)」を信条として人に対して愛想良くフレンドリーに接しよう努めているようにみえる米国人が近代という時代が深化する中で (工業化)、新しい人間関係の結び結び

方についても悪戦苦闘している。人の心を支える種々のやり方・作法が模索され、それが社会現象となる。それは社会学者リースマンが戦後の米国社会を称して「他人指向社会」⁽²⁶⁾となったとしたが、当時よりセラピー文化が形成されていたのだととらえるべきであろう。

ソーシャルキャピタルの研究で高名なハーバード大学の社会学者、ロバート・パットナムは、米国の伝統コミュニティの衰退と未来にむけた新しいコミュニティの再構築をテーマにした“Bowling Alone (一人でボーリングを)”を2000年に上梓した。

米国人は仕事を終えると友人の家を訪ね（統計的には3分の2）、年に14、15回に渡りパーティなどをして友人達をもてなす。働く場では、カジュアルで楽しい環境をつくり、互いに助け合いギブアンドテーク（相互応酬的）の友人間係をつくる。それが規範化（慣習化）している。そして彼らとの間にコミュニティ感覚（sense of community）が醸成されている、と述べている。親しさの程度は昔前に比べて減少しており、親密で深く互いに支えあう関係性にまでは至っていない⁽²⁷⁾が、親密な友人は最低一人いるという統計結果を紹介している。

パットナムは、「伝統的地域コミュニティが衰退し、それが都市空間に入れ替わる過程で、フレンドシップは伝統社会の宿命的なものとはならず、逆に自由度を得て種々のコミュニティの中に住み家を見つけ、個々のコミュニティが併存するモザイク的な多様性が保証されることになり、昔の親族的強い関わりではなく、教育を受けた、昔に比べれば視野の広がりのある人たち同志の新しい形のフレンドシップが形成され、そこには、友人として濃密な関係にはならないが緩やかな絆で結ばれた新しいタイプのコミュニティが誕生した」と表現している⁽²⁸⁾。しかしながら、フレンドシップについては、社会的絆の源泉であるものの、その後の米国社会が味わった企業のダウンサイジングやリストラクチャリングなどで雇用の安定性が失われる中で減退しており、昨今の米国人は総じて漠然とではあるが人と人のつながりが薄れてきていると感じていると統計データで証明したのである。

それゆえ、彼は「我々米国人は市民的関与を高め、お互いに信頼ができケア

194 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

しあえるコミュニティ再生意識を高めるべきであり、同時に、だからこそ、そこでのフレンドシップが重要であり、人の働き方にまで言及してパートタイム方式の普及が、個として自由な時間を確保でき社会的ネットワークが形成される」と危機意識をもって米国社会に対し問題提起を行ったのである⁽²⁹⁾。

米国社会を深い洞察力で分析したベラーを代表とする西海岸の研究者達は1985年“habits of heart”を上梓する。彼らによれば、米国社会では家族や宗教が社会的な人間関係の重要な基盤としても働き続けているが、米国史の初期に比べて、宗教が中心的な場から去り、市民的伝統から生まれる交際（アソシエーション）やフレンドシップに重心は移動する。そして、そこでのフレンドシップのイメージ自体は、植民地時代以来の米国人の間では極めてポピュラーなものであったと指摘した上で、既述のアリストテレスのフレンドシップの三つの要素に触れ、次のように述べている。

現在の私たちは、フレンドシップの第一の要素である「ともにいると楽しい」のが友人であるというふう考える傾向がある。第二の要素である「自分の役に立つかもしれない」人間とは「フレンドリー」にしておくことが大切であるとはっきり考えているにもかかわらず、何よりも自由で自発的なものであるべきフレンドシップの関係において、有用性の話をするのは何かしら場違いなことのようにも感じている。そして三番目の要素である善へのコミットメントについては、あまり理解しているとはいえない。むしろこれは、フレンドシップの概念にとってまったく異質なもののよう思われている。・・・しかし、よく考えてみると、米国の伝統的見解からすると、フレンドシップと切り離せない徳こそ米国人の「心の習慣」の根幹に関わるものであり、・・・フレンドシップと徳とはたんに私的なものとどまらず、それは公共的なものであり、政治的なものとさえ言える。なぜなら、市民的秩序（都市コミュニティ）とは、何にもまして友人関係のネットワークのことであるからだ。市民的フレンドシップがなければ、都市は公共的連帯のいかなる仲立ちもないままに、利益団体の闘争の場へと退化してしまうことだろ

う⁽³⁰⁾。

そして、ベラー達は、米国人の心的状況について、古典的な善には明確に至らないとしても、その考え方を理解することは彼らにとって難しいことではなく、独立戦争時地域を越えて結ばれていたジョン・アダムズ（1735－1826）とトーマス・ジェファソンとのフレンドシップはとりわけ有名であるが、独立戦争時代には異なる地域共同体の人間が集まり、相互の緊張、敵対、競争を越えて、注目すべきフレンドシップの関係性が構築されていた⁽³¹⁾とする。その後の米国社会は飛躍的發展を遂げる。地域の小さなコミュニティで成立していた職の機会は、地域圏に拡大し全国規模の労働市場が形成されるに至る。個は、教育のレベル・居住の自由度・競争能力の程度に応じて不確実な世界に特段の準備なくほうり出されることになったのである。

新しく出現した個は、移動性の高いミドルクラスを形成し、彼の自尊心と将来の見通しとは、ひとえに他者に対する己れの売り込みと交渉の能力とにかかることになった。ベラーはこのような状況について次のように述べている。

自律的個は他の自律的個と取引をしてゆかなければならない。このような条件のもとでは、しばしば密度の濃い社会的相互作用が生じるが、しかしそれは限られた一時的なものである。こうした相互作用がもたらす軋轢を和らげる手段としてフレンドリー（友だちらしく）に振る舞うようになる。・・・古典的な意味におけるフレンドシップはますます困難になってきた。他者の役に立つことは可能であるというよりは、人は、みな他者の役に立たねばならなくなった。また、他者とともにあることに楽しみを見出すことも可能である。しかし、交友を通じて公益につくすことは、個人がもっぱら私的利益や自分の勤める組織の利益を追求するこうした世界にあっては、時とともにますます不可能になってきたのである。女性もまた、ためらいがちにはあるが職場に進出するようになるにつれ、あるいは夫や子どもたちの競争戦線における成功に気をもむようになる。・・・フレンドシップを取り結ぶことも維持することも非常な努力を要する、濃密だが限定的な対人関係の世界が出現した

196 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

こと、そして、かつての伝統的な人間関係、すなわち、はじめから当たり前のものとして受け取ることのできる協力的（サポータティブ）な人間関係の世界が衰退したことは、個人にたいへんな緊張を強いることになった。

地域コミュニティがしっかりしてお互いに助け合う関係性の崩壊は、米国人をして相手に対して神経を使う状況へと変化させたようである。人を強く意識するほど優しく対応するような心的状況（ベラーたちはそれをナーバスネスと表現しているが）に悩むことになった。そしてそれが、米国人特有のセラピー的な人間関係を生んだとベラーは説明している⁽³²⁾。実は、この時期が、ミドルクラス（中産階級）の台頭とキャリアという言葉の出現と符合するのである。

続けてベラーは米国のセラピー的行動様式について次のように結論づける。

個は（自立し自律し、自発的に）自らに規律を課し競争心旺盛で、夢や野望を懷いて、環境の急速な変化に巧みにかつ柔軟に対応し、就学や職業上の昇進のために進んで家を出て、独立することになった。そのような状況下米国人は精神の健康⁽³³⁾をむやみに気遣うようになり、セラピー的な種々の手法や新しい行動様式をうみだしたのである。

米国に住んだ経験のある人たちは、米国人がやたらに親切であることに驚く。ショッピングセンターの駐車場などでぼうっとしていると“Can I help you?”と必ず声をかけられる。重い荷物を持っていると助けてくれる。誰彼となく目が合うと「ハイ」といって親愛の情を示す。このような風景が至る所で展開している。セラピーと愛やフレンドシップとの混在、そのようなセラピー的な人間関係が、米国では文化に昇華されているとも言えるのではないだろうか。

iii) 我々が目指したい行動様式 フレンドシップ

我々日本人がフレンドシップという行動様式をとるに当たってのいくつかの

留意点を述べてみたい。

①今我々日本人に求められるものは、日本的集団の中で無意識のうちに守られている自分に気がついて、その集団から出てみる。手を伸ばして、他者とつながりを持つとする意思であり、そのためのスキルである。その時、他者とは、広くあまねく国内外の多くの人であり、決して排他的なものであってはいけない。それは、自主的に主体的に他者とまじわり、集団に閉じこもらないでその集団の殻を破って行動しようとする意思である。今の日本人にとってとりわけ重要なのは、世界に目を向けつながろうとする遠方指向的意識⁽³⁴⁾であり、さらに重要であるのは、同質化を求めがちな日本的コミュニティで守られているからこそ、お互いに多様で異質な個であることを認めあおうとする良い意味での個人主義的な覚悟である⁽³⁵⁾。そのためには、遠くにある世界を捉えようとする時に遭遇する様々な事象を咀嚼して、高次の自分へと高めてゆく精神が必要である。翻って考えると、異質を認め合おうとすることは、表層的な「良い人間関係」を越えた「本当の人間」関係が形成される可能性が高いのではとも思われるのである⁽³⁶⁾。

我々は、グローバル化が進む中で様々な人たちからどん欲に情報を摂取しアンテナを高くし変化を察知せざるをえない状況にある。そのような中で、自らが手を伸ばして集団をつくりその集団を管理していく能力が求められる。ここでは、そのような精神のあり方や行動様式をフレンドシップと呼びたいのである。

②人と人とが向い合うときは、当然ながら、お互いを自由で自律した個性ある人間であることを認めあう。お互いがかけがいのない存在であり、つまりは「人間の尊厳」を認め合う。そしてお互いが貴賤の差別なく「偉い偉くない」という日本的序列関係性概念から解放されて、年齢・出自は、もちろん性別に関係なく「対等」であるという憲法に定められた基本理念を肌感覚で持たなければいけない。

③そして、個は、独立独歩を強く意識するがゆえに、所詮孤独であり一人では生きていけないことを理解し、フレンドリーなつながりを求め、お互いにケアする心的状態に辿りつくのではと考える。

④その時の人のつながりには大別すると二種類ある。一つは伝統社会の親族な

198 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

どの近親空間やカトリックの教会区で展開されるようなコミュニティにおけるつながり、よくいえば強い絆、悪くいえば拘束的な重い関係となるものであり (bonding)、もう一つは、工業化・知識産業化が進む中で、都市空間で展開されるようになった多種多様な人たちが重層的に織りなすコミュニティのネットワークである。混沌としながらも、そこには自生的秩序が形成されている。弱くて緩やかで軽やかなつながり（ここでは bridging と呼んでおきたいが）が存在する。我々は、この二つのつながりを使い分けることになるのだと考える。

⑤そのとき、重要なのは、自律した個の集団や組織では、自らがリーダーシップをとること、そうでないときは、集団の一員ではあるが自律した判断を行える主体としての責任ある行動をとるフォロワーシップをもつことである。決してべしみの如く口を閉ざしてしまう日本的従属構造に嵌ってはいけない。集団における自分の役割を明確化し、その責務はきちんと果たすという考え方である。

⑥日本人は、集団に価値においてその動きを適格に察知する共感性、いわゆる空気を読むことに神経を使う（ここではコミュニタリアンの態様と呼ぶ）。日本的フレンドシップはコミュニタリアンに染まりがちであるが、あくまで自分は自分であるという自己主張を内に持つことが大切で、山本七平のいう集団の中においても「水をさす」という自由度を確保するマインド（ここではリバタリアンの態様と呼ぶ）を併せてもっておくことが極めて重要である。我々は、宿命的に、この「コミュニタリアンの態様」と「リバタリアンの態様」を使い分けなければいけないのである。日本語には「間」という言葉がある。「つながり」が共通性を意味するのに対し、「間」はそもそも違いを暗示している⁽³⁷⁾。日本人はそのような意識で集団を適格にとらえていたのではないか。

⑦多種多様な集団やコミュニティで自分を演じるとき、その時の心性は一面的ではなく多面的な個、既述のペルソナを使い分けることになるのではないかとと思う。以上のようなフレンドシップに基づく人間関係性の有り様が、会社であり地域コミュニティであり、その集団の価値に影響する。ソーシャルキャピタルという概念に繋がるのである。

[注]

- (1) Oxford English Dictionary には taking account of itself or the effect of the personality or presence of the researcher on what is being investigated とある。
- (2) 樫村愛子『ネオリベラリズムの精神分析』（光文社新書2007）p168
- (3) アンソニー・ギデンズ、松尾精文他訳『近代とはいかなる時代か』（而立書房1993）p55
- (4) ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズ、スコット・ラッシュ『再帰的近代化』（而立書房1997）p210再帰的近代を参考している。
- (5) ジェラード・ディランティ、奥井智之訳『コミュニティ』（NTT 出版2009）p192、一部修正松尾精文他訳
- (6) ラッシュの言葉を借りれば「主体のエンパワーメントを必然的に伴い、仮にフーコの描くシナリオを我々に示すとすれば、純粋な個人化への道を開き、自然環境や社会環境、精神環境に関して、自立した主体性を確実に切り開いて行かねばならないのであると」手厳しい（同スコットラッシュ p 211）。
- (7) ディランティは続けて、「こうした議論のすべてから得られるものは、大衆文化という場の隅々にまで及んでいるところの、絶え間なく変容するものというコミュニティ概念である。ポストモダン・コミュニティは、文化の表現主義的な個人主義への開放に伴って到来したものであり、現代社会の空白を満たすものとして出現する。こうした考え方は、コミュニティについて非常に不確定で不明瞭な像を提供するにとどまっているとして批判されるのであるが、どこかに閉じる扉があるとする考えと縁を切っているという点で、固定的で整然とした伝統的なコミュニティ観に重大な修正を迫るものである（ジェラード・ディランティ p195）としている。
- (8) ジュレミィ・リフキン、柴田裕之訳『ヨーロッパンドリーム』（NHK 出版2006）p17
- (9) 同 p24
- (10) 同 p17、24
- (11) 同 p294、p272
- (12) 同 p278
- (13) 同 p87

200 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

- (14) ホメオスタシス (homeostasis)。同一の状態という意味である。
- (15) 樫村 p114
- (16) 樫村 p114
- (17) 佐々木毅『政治学の名著30』(ちくま新書2007) p61～63
- (18) Quinn, F ‘The Federalist Papers Reader’ (Santa Ana, Calif. Seven Locks Press 1993) p100 一部修正
- (19) 樫村 p63
- (20) アンソニー・ギデンズ、p54、一部修正
- (21) スタンフォード大学の哲学事典 (<http://plato.stanford.edu/entries/friendship/>) の次のくだりを 翻訳している。

Agape is a kind of love that does not respond to the antecedent value of its object but instead is thought to create value in the beloved)、・・・By contrast, eros and philia are generally understood to be responsive to the merits of their objects—to be beloved’s properties, especially his goodness and beauty. The difference is that eros is a kind passionate desire for an object, typically sexual in nature, whereas ‘philia’ originally meant a kind of affectionate regard or friendly feeling・・・
- (22) 同哲学事典を参考にしてている。
- (23) 同哲学事典及び『ニコマコス倫理学 下』(アリストテレス、高田三郎訳 岩波文庫 p71、72) を参考にしてている。
- (24) deficient mode of philia
- (25) 同哲学事典を参考にしてている。
- (26) 1961年アメリカの社会学者デビッド・リースマンが“lonely crowd (孤独な群衆)”を著した。それは予期せぬベストセラーとなったと伝えられている。彼は、伝統からの拘束から解放され国家の規制も緩和され個性が発揮でき権威に頼るのではなく自己に内在する規律を意識しその規律に基づいて自分で判断・行動する、自律する近代の個とでも言うべき19世紀型人間を、頑固な人間類型(「内部指向型社会」における性格)として捉える一方で、新中産階級と呼ばれた専門職や管理職などの給与生活者について分析し、新しいタイプの人間類型を提示する。戦後の豊かな消費社会の出現の中で埋もれていく個人が安定志向となり、同時に周り対する関心が高じて逆に他人にセンシティブにならざるをえなくなったし、リースマン

はそれを「他人指向型」と称した。そこでの個人は、他者への同調性に配慮し他者からの信号に敏感で、しかし他利主義・連帯主義（solidarity）にまでには至らず、他人の反応を考慮して自己の判断をくだす。知らず知らずに（雰囲氣的に）自律性が同調性に巻き込まれる、そのような「他人指向型」人間類型を生み出したとした（デビッド・リースマン『孤独な群衆』序文（みすず書房1964）および山田八千子『自由の契約法理論』（弘文堂2008）P128などを参考に作成している）。

- (27) Robert D. Putnam 'Bowling Alone' (Touchstone 2000) p87
- (28) 同 p96
- (29) 同 p407
- (30) ベラー他『心の習慣』（みすず書房1991）p139
- (31) 同 p140、141を原典（Bellah et al. 'Habits of heart' 《University of California Press 1985》p115、116）を参考にして修正。
- (32) 同 p142、143
- (33) 『アメリカにおける心の健康』の著者は、セラピー的人間関係のもつ独特な性格を次のように書いている。「現代の英雄は、契約によって結ばれた人間関係のなかで、体験を生き直すことによって自己を追求する。こうした契約による人間関係とは、その定義上、「現実の生活」から切り離されたものであり、人工的なものである。すなわちその関係のなかで現われる感覚や感情や情緒はそれに固有のものではなく、現実の世界における他の第一次的な人間関係に本来属するものにすぎない。……精神分析（と精神医学）は、人々を社会や人間関係から引き離すことによって治療を試みる唯一の心理治療の形態である。他のすべての治療法シャマニズム、信仰治療（フェイス・ヒーリング）、祈りは、治療の過程に共同体を持ち込む。実際それは、患者と他の人々との相互依存の関係を治療の過程における中心的な仕掛けとして用いる。現代の精神医学は、問題を抱えている個人を感情的な相互依存関係の流れから切り離し、知的な／言葉による議論・解釈・分析を行ないながら、問題から距離を取り、それを巧みに操ることによって問題に対処するのである」（ベラー他 p146）
- (34) 早坂は sensitivity（外へ広がった感受性）、but sensibility（自分の世界にこもりがちな敏感さ）と区分して、遠方指向の重要性を説いている。（早坂泰次郎『人間関係の心理学』（講談社新書1979）p201

202 法政大学キャリアデザイン学部紀要第7号

(35) 認識とは統合的主観において世界を捉えようとする努力、科学とは素朴な主観を客体との遭遇を通じて高次の主観へと統合してゆく努力。その時統合的主観において世界を捉えようとする努力と素朴な主観を客体との遭遇を通じて高次の主観へと統合してゆく努力が必要である。(早坂 p128)

(36) 早坂 p189

(37) 早坂 p188

ABSTRACT

The “Career Design” Era Has Started in Japan (3)

Hiroyuki KOKADO

This paper, the third in the “Career Design” series, is sub-titled “towards a discipline of career design”. First, it covers the issue of the individuality of Japanese, which is quite different from that of Westerners. Second, it addresses what kind of university education is suitable for Japanese youth in light of contemporary Japanese society, and also examines liberal arts and liberal education. Third, it proposes what really should be learned by Japanese youth. Finally, by introducing recent achievements in career studies in the United States quoting from the “handbook of career studies,” it proposes a tentative framework for this discipline in Japan.

Four Concepts that Occur to Me When I Think of Career Design

When I tried to study careers from a philosophical viewpoint this year, I encountered the following four terms: reflexivity, homeostasis, traditionalism and friendship. This paper examines these concepts from the standpoint of designing a career. The first and second concepts are related to one’s way of thinking, and the third and fourth concepts are important when Japanese are inclined to pursue a naturally satisfying career life.